

# トランスジェンダーを いきる (23)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

## 牛若孝治

### 周辺化された男たち

#### ジェンダー化された鍼灸マッサージ治療院

##### 1 始めに

男の心身に障害がないこと、男は外見へのコンプレックスを感じていないこと、男は女性を性愛とする異性愛規範に則った性的嗜好を持っていることを前提に所帯をもち、稼ぎ手にしての役割を果たすこと等、男であることに対する何らかの基準を共通に満たしていることを条件に、男社会が構築されているように思われている。

しかし、現実の男たちは、これらの基準をすべて満たしているとは限らない。そこで筆者は、一般的とされている男社会の基準を満たしていないと思われる男たちを総称して、「周辺化」と意味づけた。その上で、どのようにして「周辺化」が起きているのかについて、特に筆者が成業としている鍼灸マッサージ師の仕事のあり方を通じて、男たちにどのようなスキルが求められているか、ジェンダー化された鍼灸マッサージ治療院の構造と、身体の性別は女性・ジェンダーの性別は男性の筆者が、女性として治療院に勤務した経験みについて記述する。

##### 2 男社会から周辺化された男たち

心身の障害、外見への何らかのコンプレックス、ゲイやバイセクシュアルのような女性を性愛とした異性愛嗜好からの逸脱、経済的困窮などは、標準とされている男社会の中では、排除された状態にある。彼等は、自らの意思とは無関係に、一方的に社会から「周辺化された状態」といえるだろう。この「周辺化された状態」をベースに、彼等がどのように受容しているかを2つのパターンに分類する。

###### ①二重の「周辺化」

これは、心身に障害のある男同士のホモソーシャルな関係性において、再十度の障害または重複障害のある男たちが更に「周辺化された状態」をいう。したがって彼等は、一般的な男社会から周辺化された上に、自分より軽度の障害のある男たちからも周辺化されているという「二重に周辺化された状態」におかれている。逆の言い方をすれば、軽度の障害のある男たちが、自分たちより重度または重複障害のある男たちを周辺化することで、より一般の男社会のあり方に近づこうとする現象、つまり、自分より重度または重複の障害のある男たちを周辺化することで、自分の優位性を堅持したいという心性がそこにある。その代表例が「ジェンダー化された治療院システム」である。

#### (1) ジェンダー化された鍼灸マッサージ治療院システムの概要

特に、あんまマッサージ指圧では、一般的に、「男は女より体力があり、指の力も強いが、女は身体も小さいし、体力も指の力もない」という、男女の生物学的構造の相違を根拠としたジェンダー意識の下、鍼灸マッサージ治療院でもその意識を自明視している。だから、強いマッサージを希望する場合は男・それほど強いマッサージを希望しない場合は女、というように、来院者が希望するマッサージの強度と術者の性別が記号化されて割り当てられることもしばしばである。

このようなジェンダー意識は、鍼灸マッサージ治療院に従事している術者だけではなく、事務の受付や個々の来院者も共通に持っているだろう。もちろん、術者個人名で指名する来院者もいるが、例えば来院者で、初めから強いマッサージを希望する場合は男・それほどの強いマッサージを希望しない場合は女、というように、術者個人名で指名するのではなく、術者の性別で指名することも多い。

身体の性別は女性・ジェンダーの性別が男性の筆者は、盲学校時代、鍼灸マッサージ師免許取得のための勉学に励んでいたころは、女子の中でも痩せ型で、あんまマッサージ指圧の技術においても指の力がそれほどなかったのも、いつも劣位に立たされていた。しかも、ジェンダーが男と言うことで、実技の時間は今振り返っても地獄のような日々だった。筆者は、鍼灸マッサージ治療院のジェンダー化されたシステムを意識して、なんとか劣位から脱するために、マラソンや水泳などのスポーツを通じて、基礎体力を付けていくと、それに伴って力も着いてきた。

#### (2) 視覚障害以外の障害または病気を有する鍼灸マッサージ師へのバッシング

しかし、このようなジェンダー意識に基づいた自明性は、しばしば裏切られることがある。

特に、視覚に障害のある男たちが中心で経営している治療院は、交通機関の利便性を問わず、一般社会から周辺化されたコミュニティとして認識されやすい。しかもその中で、視覚障害以外に、たとえば人工透析を受けている人や、過去に大手術を受けた人など、男でありながら、あまり体力や指の力がない人が多かった。視覚障害のみの男たちと比較して、視覚以外の障害や病気を持つ男たちが、体力や指の力不足による業績の低迷によって、視覚障害のみの男たちからより周辺化された状態に置かれやすい。これは、視覚以外の障害や病気を持つ男たちが、「男なら体力や指の力があって当然」というジェンダー化された治療院システムから逸脱し、排除されていること、つまり、そ

のような男たちとて、男の身体を持つがゆえに、体力も指の力もあって当然、というジェンダー役割を果たしていないことを示している。そのような男たちへのバッシングは、視覚障碍のみの男たちだけに留まらず、来院者からの直接・間接的な方法で行われる。そこに、「男の癖に」というジェンダーバイアスが加わると、男たちの男性性が疑われるほどに貶められる結果にもなる。したがってこの局面では、男たちが視覚以外の障碍や病気を持っていることへの考慮はまったくなされず、視覚障碍のみの男たちと同等の体力や指の力があるものとして扱われるのである。

また、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちへのジェンダーバイアスをかけた視覚障碍のみの男たちの心理状態として、視覚以外の障碍や病気を持っていないことへの優位性を堅持しながら、一般の男社会に近づこうとする心性が見て取れる。すなわち、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちを周辺化しなければ、自己の優位性を保証することができない、あるいは彼等を周辺化することで、より一般的な男社会に近づくとする幻想を持っているといえるだろう。

### (3) 周辺化した彼等を鼓舞する目的で利用された自己の女性の身体

更に、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちへのバッシングはそれだけに留まらない。

10年以上、女性としてあちこちの治療院に勤務した筆者は、学生時代から続けていたマラソンや水泳などのスポーツを通じて基礎体力作りをしたことで、指の力も着き、来院者からの指名も多かった。そこで、業績においても男たちと同等に、しかも、視覚障碍のみの男たちとほぼ同等だったこともあった。ただ、女であると言うことで、最初から来院者に敬遠されたことや、実際にマッサージの施術を行った際に、女であることで指の力不足を自ら感じたり、来院者からのクレームなどで不本意な結果に終わったこともしばしばだった。

とはいえ、男たちからみると、筆者の業績は、相対的にジェンダー化された治療院システムからは逸脱した結果、つまり、女なのに男波に業績を上げている、と思われたのだろう。そこで、男の身体を持つ視覚以外の障碍や病気を持つ男たちが、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者というだけではなく、女の身体を持つ筆者の、これまたジェンダー化された治療院システムから逸脱した男並の業績を引き合いにして、更に彼等を鼓舞するという方法が見て取れる。そこには、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者である彼等を、「男の癖に」というジェンダーバイアスによって、いったん男性性を疑わせるようなバッシングをしておきながら、女の身体を持つ筆者が、ジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績を示していることをうまく利用して、彼等を鼓舞しようとする意図が伝わってくる。

要するにここでは、視覚障碍のみの男たちによって、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちをいったん周辺化した上で、その周辺化した彼等を鼓舞する目的で、女の身体を持つ筆者の「男波の業績」が利用されたのである。もっと言うなら、周辺化した男たちを鼓舞するための材料として、女の身体を持つ筆者のジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績ではなく、筆者の「女の身体」が、周辺化した男たちを鼓舞するための材料として利用されたのである。

## 3 終わりに――現在、男性として雇用されて

2年前より、一人で病院や治療院に行くことが困難な人たちの家を訪問して行う訪問マッサージの仕事をしており、現在は男性として雇用されている。男性として雇用されたことで、筆者の心理的状态は安定し、今のところ、職場の上司や同僚たちからの理解は得られていると筆者は考えている。

しかし、筆者には不安が残る。それは、現在訪問している患者から、他の男たちより指の力がないと思われていないか、ということ、つまり、体力や指の力で、他の男たちから「周辺化」されないか、ということである。もちろん、筆者の身体はもともと女性であるから、男たちから「周辺化」される要素はあるのだが、マッサージの仕事において、他の男たちから「周辺化される」ということが、筆者にとっては恐怖以外の何者でもない。このように考えてみると、筆者にとって「周辺化される」というのは、切ても切れない課題のように思われてならない。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）